

特別講演

「クリエイションの核心ー比類なき創造力ー」

2014年1月28日(火) 遠藤記念館大ホール



山本 耀司 氏

Yohji Yamamoto

ファッションデザイナー

司会 ただいまより学校法人文化学園文化ファッション大学院大学主催、IFFTI (The International Foundation of Fashion Technology Institute) 共催、文化ファッション大学院大学ファッションウィーク特別講演およびファッションショーを開催いたします。このプログラムは、ONWARD ホールディングス、三越伊勢丹ホールディングス、東レ、YKK、STYLEM 瀧定大阪、GOLDWIN、日本ゴア、イトキン、レクタラ・ジャパン、クインライト電子精工、織研新聞社、東海サーモ、ユナイテッドアローズ以上 13 社の協賛でお送りいたします。開催に先立ちまして文化学園理事長、文化ファッション大学院大学学長・大沼淳より皆様へ開催のご挨拶をいたします。

大沼 第6回文化ファッション大学院大学のファッションウィークに臨みまして一言ご挨拶を申し上げます。文化学園大学内に学術研究ならびに研究者の養成を目的とした文化学園大学大学院が設置されてから 20 年ほど経ったとき、国により新しく、職業としての専門家を養成する専門職大学院制度が設けられました。そのファッション分野の第1号として文部省の許可を得て誕生したのが、この文化ファッション大学院大学です。それが 2006 年のことですから、今年で 9 年目を迎えることとなります。

これまで「文化祭」の名称で行われてきた学園祭に加え、6 年前から、「文化ファッション大学院大学ファッションウィーク」と称して在学生の作品をショーや展示の形式で内外の皆さま方にご覧いただいています。今回は文化学園全体としても 90 周年の節目の年にあたりますので、山本耀司さんに特別講演をお願いすることができました。大変お忙しい中でお越しいただいたことに心から感謝を申し上げます。今日は修了年次生による修了ショーもご覧いただけます。このファッションウィークには、オーストリアのウィーン市立モードシュール・ヘッツェンドルフ校の学生と、ロシアのサンクトペテルブルク国立技術デザイン大学の皆さま方も参加して、三者の合同ファッションショーとなっております。

もう一つ私どもの 90 周年記念行事といたしまして、国際ファッション工科大学連盟の 23 カ国 45 の大学が加盟している IFFTI (16 回目の国際会議) の年次総会が現在この学園内で設定されています。そして本日はその国際会議に参加している 100 名を超える皆さま方にもご来場いただいています。この IFFTI は「THE POWER OF FASHION」というテーマで開催されており、特に本日はイタリア大使館、オーストリア大使館、そして文部科学省の審議官をはじめといたしまして、われわれが日頃お世話になっております日本のファッション産業界の有力な方々、そしてまた多くのジャーナリストの皆さま方にもおいでいただき、この IFFTI ならびに文化ファッション大学院大学の行事に参加していただけることを大変光栄に思っております。

この後引き続いて行われます特別講演をお願いした山本耀司さんは、慶應義塾大学を卒業してから本学園内のデザイン科に入学されました。当時すでに私もその責任者になっておりまして、山本さんのことはそのときからよく存じ上げておりました。デザイン的な能力については当時から際立って優れておりましたけれども、それだけでなく他の学生の面倒も大変よく見てくださり、私も学生時代から印象に残っておりました。そして、在学中にファッション界の登竜門である装苑賞をお取りになって「ワイズ」という会社をご自分で興し、世界に飛び立っていかれました。30 有余年におよぶパリコレクション等を中心にした活動の成果として、世界中に名前が知られるようになった山本さんが本学園出身であることを我が校としては誇りに思っております。そのようなご縁で今回山本さんにお越しいただきましたので、この場を借りて併せてお礼申し上げ、開会にあたってのご挨拶に代えさせていただきます。

司会 開演に先立ちましてこの文化ファッション大学院大学ファッションウィークについてご説明いたしま

す。文化ファッション大学院大学ファッションウィークは、次の時代のファッションビジネスの方向性を議論する場として位置づけられています。今年度のテーマは、「クリエイションの核心—比類なき創造力—」です。今日、世界のファッション界には様々な問題が山積しています。この状況の下、ファッション、そしてデザインのクリエイションについてその核心を考えることを通じて、時代のイノベーションと今後の方向性を展望いたします。申し遅れましたが、私は本日の総合司会を務めさせていただきます文化ファッション大学院大学ファッションデザインコース1年次生の山本彩乃と申します、どうぞよろしく願いいたします。それでは山本耀司様にご登場いただきます、皆さま盛大な拍手でお迎えくださいませ。

これからモノを創り出していく皆さんへ—「見る力」と「継続する力」—

山本耀司氏 皆さんこんにちは。今日のオーディエンスはモードに関する一流のメンバーばかりで、公開処刑を受けに来たような感じがしております(笑)。

私は服を創って40年、服を創る職人であります。職人であることを決めたのは、自分の言いたいことを言葉や文章にしない、服にして分かってもらうと決めた人間だからです。それを40年間貫いてきたつもりです。であるにもかかわらずここへ座って喋れと。これはほとんど拷問ですね(笑)。その拷問に70分か80分耐えられるかどうか分からないので、できれば私が喋る時間は短くさせていただいて、後半は皆さんとの質疑応答の時間にしたい。私はファッションの評論家でも分析家でもございませぬ、言葉で語り尽くせるほど自分の言葉を持っておりませぬ。ただ、私自身の服を創り続けた経験からどんな質問でもお答えできると思っておりますので、質問をどうぞご用意ください。

2月28日にパリでファム(女性向け)のコレクションがありますが、それに向けての4回目の仮縫いが昨日終わったところです。1月16日にオム(男性向け)のコレクションをパリで行いまして、19日にY-3というadidasと組んでいるスポーツファッションブランドのショーをしました。アディダスのショーが2時半から始まって3時過ぎに終わったんですが、終わってすぐ車でシャルル・ド・ゴール(空港)へ直行して、今は日本にいるという「すごくお忙しい方」です(笑)。今現在ファムのコレクション準備の真っ最中でようやく昨日になって28日のショーをどうしたいかがはっきりしたところなので、本当は会社にいたいんです、こういうところにいたくないんです(笑)。それをどうか早く受け止めていただいて、精いっぱい話しますのでどうぞよろしくお願いいたします。

先ほども申しましたように、自分の言いたいことは服に込めるというやり方ですとやってきました。なぜそれができたかと振り返ってみますと、すごくシンプルで単純なことなんですが、母親に丈夫に生んでもらったというのがひとつ大きくあります。というのは、今日は欧米の学校の先生方もたくさんいらっしゃるのですが、その方々が多分お気づきになってない点を申し上げます。われわれ日本人デザイナーがパリコレクションに参加するためには、コレクションの2日前か3日前に現地に着かなければいけません。そうすると、東京とパリでは夏で7時間、冬で8時間の時差がございませぬ。時差というのは大変きついもので、頭の切り替えはできても体内時計はすぐに切り替えられないんですね。それで調子が悪くなる、体の具合が悪くなる。パリコレに進出してからの32年間はこの時差との闘いでもありました。ヨーロッパでジャーナリストから、「あなたはどこに住んでいるの?」と質問されたときにジョークで「飛行機の上に住んでいる」と返答することもあります。数えてみますと去年は12回海外出張しています。パリに4回、ベルリンに1回、ニューヨークに2回、中国に

4回、ほぼ1カ月に1回のペースですね。日本へ帰ってきても時差はありますから、その仕事に耐えられる丈夫な体に生んでくれたことを母親に感謝しています。

「反抗心」が継続の力となった

何を言いたいかというと、服を創ることに限らず、モノを創ること、表現をすることというのは一生に一回は誰でもできるんです。しかし表現者は宿命として、それを継続し続けなければいけない。継続する力があるかどうか、継続する動機があるかどうか、なぜ継続できるかが一番のポイントになっていると思います。私の場合は幸か不幸か母親が戦争未亡人でした。戦争未亡人という言葉はこの会場の若い人にはもう分かりにくいかもしれませんね。戦争で夫を亡くし、再婚してくれれば楽だったんですけど、母一人子一人で再婚を諦めて、僕のためだけに生きると大決心をしてしまったんです。それからすごく頑張って洋装店を開き、僕を育ててくれたわけです。

そのために僕は幼いころから、働く女性、つまり母親ですが、働く女性を通して世の中をずっと見てきました。おかげで、世の中がどれだけ不公平か、特に私の母親の時代の女性が、本当にくだらない、まさかと思うような小さなことまで含めてどれだけ不公平に扱われているかといったことを4、5歳のころから見続けてきましたので、いわゆる社会一般というものに対する抵抗感、強く言うと反抗心が最初からありました。ですから、社会の常識といったものに対して、違うんじゃないか、そこ間違っていないかと。たとえば服装の美学を例にすると、いま流行っているもの、みんなが美しい、かわいいと言っているものに対する反対意見を、生涯を通して言い続けるという姿勢が継続するパワーになったんだと思います。

ある作家の言葉に「芸術家の役割は社会に反抗することによって社会に貢献することである」という、芸術家にとっての聖書のような言葉があるんですね。その通り、僕はパリに進出したころからヨーロッパのブルジョア的、予定調和的美学に対して反抗し続けるという服を創っていました。ですから最初は非常に叩かれましたし、ショーの最中にブーイングが起きることもありました。ニューヨークの有名な新聞では、見開きで僕のコレクションとコム・デ・ギャルソンのコレクションの写真に筆で×をつけて載せて、下にローマ字で「SAYONARA」って書かれたんです。ここまで嫌われたらむしろ痛快だと、陰湿に嫌われるよりもむしろ気持ちいいというくらいバッシングされました。

初期に僕を賞賛してくれたのはほんの一部で、ジャーナリズムでは8割ぐらいがNOでした。ところがバイヤーたちは、どこから来た何者の服であろうと、何か変わっていて目新しければ売ってみたいという態度でした。店を持って切り盛りして生活している人たちは、言葉を操る人よりも真剣なんですね、生きるか死ぬかですから。それでバイヤーが喜んでくれ、押しかけてくれたんですが、パリ進出当時の僕は輸出の仕方も知りませんし、事務所のエレベーターが壊れるほど押しかけてきたバイヤーから「輸出しろ」、「売れ」と言われて何が起きているのか分かりませんでした。

そんなところから始めて、先ほど申し上げた反抗心を持ち続けながら、これでもかこれでもかと異議申し立てをし続けて10年ぐらい経つとだんだん受け入れられてくるんですね。10年過ぎると「偉い！」とか言われるようになって、15年ぐらい過ぎると「巨匠」とか「マエストロ」って言われて、反対意見を言いに行っただけに受け入れられてしまった。倒したいものを倒したつもりが受け入れられてしまって拍子抜けした時代が、パリへ進出して15年過ぎた頃にきました。その時期の5、6年は何を創っていいか分からない、私のデザイナー人生で一番つらかった時期だと思います。そこから反抗する相手を変えるようにしていきました。大げさな

ことを言うと、今までやってきた自分、自分の過去、自分の褒められたものに反抗するというふうに。まるでパラドックスのように聞こえるでしょうが、そのころはショーが終わった途端に次のショーのイメージが湧いてきていました。今回は通じなかったなということがあればその通じなかったところから次のイメージが湧いてくることの繰り返しです。

発表し続けることで自分を発見する

ファッションビジネス、特にデザイナービジネスは半年に一遍新しい提案をしなければいけない、とても過酷な世界です。すぐ来ちゃうんですね、次のコレクションが。それでもやらなければいけないし休むわけにいかない。少し話の流れを中断しますが、ファッションデザイナーは休むと駄目になるんです。なぜかというところの半年間の流行の空気、ファッションのモードの空気を吸っている中で、流行に汚染されている部分まで含めて吐き出すことが作品を発表するってということなんですね。ところが作品の発表をやめちゃうと汚染されっぱなしになっちゃって次が出てこないんです。私も一回だけ休んだことがあります、取り戻すのに大変な時間と年数がかかったことを記憶しています。

そういうことも含めて、ファッションデザインの世界は継続すること、継続することによって見えてくるものがある。それから、自分の創ったものをぶつけることによって自分が何者であるかが分かる。これは人間の存在そのものと一緒に、自分独りでは自分のことは分からないけれども、誰かとお付き合いすることで自分が見えるようになる。これを哲学の言葉で「他者の発見」と言います。自分を発見するためには他者を発見しなきゃいけない、これはファッション的に言うと「発表し続けること」です。私は発表し続けることによって、自分は今どんなコンディションなのか、どんな美学に魅惑されているのかに気づかされるという年数を過ごしてまいりました。

自分の足で歩き、自分の目で見てほしい

最近私が反抗してきたのは、いわゆるファストファッションというものでした。「でした」と過去形にしています。世界中、特に日本では顕著にファストファッションが流行しました。ファストフードと同じ意味のファストです。日本という国は最近やたらとコンビニエンスストアが増えましたね。僕が仕事をしているフランスのパリでは、いまだにお肉屋さんとかお魚屋さん、野菜屋さん、果物屋さんがあるんです。東京の中心からはそういう店がみんな無くなって、全部スーパーマーケットかコンビニになってしまった。それでコンビニエント、便利という言葉が町中を制覇してしまって、日本中どこに行っても同じ風景、ちょっと家から出るとコンビニばかりあるという国になってしまった。そこが僕にとって残念で非常に腹が立つ。便利というのがどんなに僕にとって醜く見えるか、多少不便なほうが美しいじゃないかと、東京とパリを比べて見えています。たとえば、パリにいて暖房のボイラーが故障したので修理の電話をしたとするとボイラー屋さんは「すぐ行く」と言います。すぐというのは、だいたい2、3日です。「3日待ってくれ」って言われるとこれは1週間待たされます。1週間待ってくれと言われたら、まあ来てくれないでしょうね(笑)。それが結構居心地がいいんですよ。便利じゃないけども、人間の生活ってそれくらいのことはちょっと我慢するところに味わいがあるって最近気付いたんです。日本はサービス過剰で「便利」にスポイルされて、個性が際立たなくなっている。

話は飛躍しますが、僕たちが若いころはリュックサックを背負って世界中を見てまわったんです。低開発国へ行き、熱帯の地域へ行き、自分の足で歩いてじかに肌で感じ、匂いを感じ、現地の言葉を聞いて世界を学ぶことをやっていました。それが今の若い人は、インターネットを開けば自分の行きたい場所をすぐパッと見られる。この便利さのおかげで映像を通してだけでしか世界を知らない、これは大問題です。

このファッションウィークのテーマは「クリエイションの核心」ですが、クリエイションの核心に触れる問題です。要するに、映像でしかモノを見ていない若者がモノを創れるのかという大きな疑問を私は抱いています、危ないぞと。だから、私は若い学生と話す機会があれば必ず、「コンピューターは見るな、自分の憧れているものは自分の足で歩いて自分の目で見ろ」と言っています。コンピューターで見ると分かった気分になっちゃうんですね、それが一番よくないんです。

今日はこの場をお借りして、さまざまなお立場の皆さんがいる前であえて偉そうに言わせていただきたいのですが、若い人も先生方も、見る力を育てていただくことがどんなに大事かを強調しておきたいと思います。見た気になっているだけで本当は見えていないのが今の若者の現状ですが、これはこれからモノを創りだしていく人間のコンディションとしては非常に危ない。これを、今日私がここで勝手に喋っている中の一大テーマとしてご提案させていただいて、後は質問の時間に入らせていただきますので、質問のある方はどうぞよろしくお願い致します。

質疑応答

質問 ファッションをデザインする上での文化の影響と重要性について教えてください。

山本耀司氏 これはよく質問される問題です。特に、日本は英語で言うと far east (極東)、ここから先は海しかないというぐらい極東の島国です。極東の島国から出てきたやつがどうしてヨーロッパのど真ん中のパリでこんなもの発表できるんだって意味合いで、「おまえはジャパニーズだろ、日本の文化を表現したいのか？」みたいな質問をよくされました。そのたびに、「悪いけど俺は日本人だから日本を発見する必要ないんだ。俺の中に日本という血が流れているから、自分が好きなように創れば手先から日本の文化が自然と服に伝わって、それが他国の人間には日本的に見える可能性もあるだろう。でも、他国の人間が僕の服の中に日本を発見してもかまわないし勝手だけど、俺は意識してやってないよ」と答えていました。ですから、どの国の人も自分の国の文化について発見する必要はないんですね、自分の血の中に流れていますから。もし、自分は何人だから自分の国の歴史をちゃんと知らなきゃクリエイションできないとお考えでしたら、それはちょっと誤りです。代々DNA とかは血の中に脈々と流れているものですから、あんまり自国の文化論をモノ創りに強調するのはかえって何かくさいものになるって可能性があるんで、その辺は十分に気をつけたほうがいいと思っております。

質問 山本さんのデザインの中で黒という色はどれだけ大切なのでしょう、またなぜ大切なのでしょう。黒をご使用になる理由はなんですか？

山本耀司氏 これは数万回は受けた質問です (笑)。「Why Black ? (なぜお前は黒なんだ?)」と。だから 1

月 16 日のメンズのコレクションでは全部プリントでカラフルな服ばかりのショーをやって、俺だって色を使えるんだぞというのを証明してきました。ただときどき、往々にして黒に偏る傾向がもちろんございます。それはなぜかという、本当は色の問題ではないんですね。僕は服のフォルムであるとかカッティングの線の美しさとか、シルエットや服の動き、垂れ、そういうものに非常に興味を持って服創りをしているために色が邪魔になることがある。そのためにモノトーンっていうんですかね、天然色映画に比した白黒映画のようなものです。白黒で発表したほうが自分のカッティングに対する考え方がより分かってもらいやすい、色はむしろ邪魔だという意味で色を使わない場合も非常に多かったということです。

質問 山本さんは着物デザインをメインにしたコレクションを行っていますが、今の若者の世代は着物のような日本の伝統文化に触れる機会が少なく、山本さんの時代の人ほど日本の文化が染みついていると思います。若い人が日本的なデザインをする上で日本文化についてこれだけは知っておいたほうが良いということはあるでしょうか。

山本耀司氏 あなたと僕では 50 歳ぐらい歳の差があると思うけれど、日本の伝統文化に対する気分は一緒です。僕も着物の文化なんか学んだことも勉強したこともありませんでした。僕はそれまで日本人であるからこそ、着物的なものを持っていくのは恥ずかしいと思って着物地を使ったショーをしませんでした。要するに、お土産デザイナーじゃないんだからインターナショナルな手法でデザインし続けると決めていた。日本的なるものは僕にとってタブーだったんだね。自分の中でタブーにして閉じこめていたんです。それがパリに出て 20 年ぐらいたって、そのタブーはもういいだろうと。自分がどういう表現者かを分かってくれた人に対して一番初めにタブーを壊したのが着物地のショーでした。女性物は幅が 37 センチメートル、男性物は幅が 42、3 センチメートルという生地幅の規定がある中でクリエイションするのはとてもおもしろい実験でした。もう一つ、友禅染めや絞り染めといった日本に残る伝統的な染めの技術を現代ファッションによみがえらせるのも大変刺激的で楽しかったです。だから僕が言いたいのは、着物を勉強してないから自分には着物の文化がないと思う必要は全然ないんですよ。自然にあるから、大丈夫だから。

質問 私は日本のアパレルの品質に関係する仕事をしています。以前は日の当たらない仕事でしたが、最近「ジャパネクオリティ」ということで世界から日本の品質が注目を浴びていることを感じるが増えてきました。実際に海外から「ジャパネクオリティ」と言われたときにどういった強みがあるのか、どういったものとして捉えられているのかということをお山本さんの観点から教えていただけますでしょうか。

山本耀司氏 昔々から、ヨーロッパからシルクロードを伝わって中国を伝わって朝鮮半島を伝わって、産業技術も含めた全ての文化がたどり着く最終地点が日本だったんですね。これは日本人としてうぬぼれて言っているように聞こえる危険性がありますが、最終地点だっただけに全てのものが日本に来てから洗練されるんです。で、手先の器用さという、洗練に必要な技術力が日本人には備わっていたと。これ、僕が日本人の手先の文化論を話しても絶対に届かない進化論的な部分もあるので非常に申し上げにくいんですが、たとえばサクランボの種をサンフランシスコに持って行って植えるとプラムができちゃうんだって。ほかにも、キュウリって野菜はパリで買うと日本のものの倍ぐらい太くて倍ぐらい長いんです。そういう意味で、日本の土壌、土がすべてのものを小さく洗練させる DNA を持っていたんです。

そういう意味で、メイドインジャパンと言われるものがどうして優れているのかというのは、創る人たちが洗

練されているからだと思います。ただし、日本は先進国になっちゃったおかげで平均賃金が上がってしまい、メイドインジャパンは高価になりました。そのために、クオリティはいいけどちょっと値段が張るというものが一時全然相手にされなかった。ファッションを例に挙げますと、綿を作る紡績、紡績から糸を作って織物にする織物産業、そういう産業が、バブルが崩壊してからどんどん海外に出てしまっただけで日本からは無くなってしまったんです。

私にも関係ありますから言わせていただきますが、沖縄がアメリカ領から日本領に返還されたときに、当時の佐藤栄作総理がアメリカと密約を結んで日本の繊維に大きな関税をかけたために、日本の繊維産業が全部駄目になったんですね、浜松の綿が全部駄目になり、一宮のウール産地もほとんど全滅しました。ファッションだけで言いますと、今では父ちゃんと母ちゃん二人でなんとか近所の人たちと一緒に持ちこたえている小さな機屋さんとか染物屋さんしか残っていません。そういう意味では、いわゆる近代的な産業、航空機械の部品とか宇宙開発の部品も技術力が高いのは全部町工場でしょ。そういうものが日本にはまだ脈々と残ってはいますが非常に体質が弱いです。

ここからは国に申し上げたいんですが、繊維産業なんかしろよと。僕が去年旅したシンガポールと韓国は、国が若いデザイナーを育てるためにファッション産業に補助金を出しています。日本は繊維なんかもう産業として全然当てにできていません。そんな国の中で若いファッションデザイナーが育つかというと大変疑問です。時代という実体の無いもののせいにするのは一番ずるいんですが、少なくとも僕らのころは若いデザイナーが創った服を仕入れてくれるお店がたくさんあったんです。いま若いデザイナーが創った服を置いてくれる店が無いんです。百貨店も置いてくれません。だから若いデザイナーを育てようっていう土壌が日本から無くなりました。学校だけがあります、文化ファッション大学院大学みたいな優れた学校がね。ただし、一步社会に出て産業とかビジネスになると、日本には若いデザイナーを育てようという土壌が全然ありません。これからの若手は世界に打って出ないと駄目なんですね、日本は置いてくれる場所がありませんから。

繰り返しますが若いデザイナーと話をするときは、「日本だけ考えてちゃ駄目だよ、世界を見ろよ」と言っています。実際に若いデザイナーが現れている国を言いますと、中国とか、もともとソビエト連邦の属国であったバルト三国ですね。2年前に、フランスのイエールという地中海沿岸の町で世界中の若手デザイナーのファッションコンテストが開かれて、僕も主任審査員として招かれて行ってきました。そこで2等賞に入ったのがエストニア出身の女性で、お祖母ちゃんとお母さんからニットを習ったって言ってニットばかりで8点出してきたんですが、すごく強い作品だったんですね。僕はすごく感動しました。その子はお祖母ちゃんとお母さんから家内工業的に習っただけで世界中のどんな有名な学校も出ていません。その子はいまウチでコレクションのニットブランドの主任として働いております。

つまり僕が申し上げたいのは、ファッションというのはある程度ハングリービジネスの要素を持っているぞと、恵まれた環境からは優れたデザイナーは出てこないぞと。ちょっとハンディキャップがある、ちょっと恵まれていない、ちょっと貧しい国から出てくるぞというのを最後に申し上げておきたいと思います。

質問 山本さんが文化服装学院の学生だった時代について伺いたいのですが、学生時代はどういったことを念頭においてクリエイションしていらっしたのか、そういうことを踏まえて、ここにいる学生がどんなことを念頭に置いて学業に励んだらいいか、お話をお願いします。

山本耀司氏 文化服装学院のころの私は、指貫をはめて運針するのが嫌いだったので隣に座っている女の子に手伝ってもらいました。それから一番嫌だったのはボタンの穴かがり、すごく難しいでしょ穴かがりって。あ

これはね、「昼飯奢るからやってくれ」って言って同じクラスの女の子にやってもらいました。熱心だったのは、子供服メーカーとかアパレルメーカーが主催するファッションコンテストにデザイン画を出すことです。3等以内に入ると賞金がもらえるので、デザイン画をいっぱい描いてコンテストにいっぱい出品していました、学生時代はコンテスト人間でした。

質問 山本さんの一番好きなファッションデザイナーを教えてください

山本耀司氏 2名おります。1名は尊敬しているというよりライバルですね。コム・デ・ギャルソンの川久保玲さん。若手で大好きだったのはアレキサンダー・マックイーン、残念ながら彼は亡くなってしまいました。今はおりません。

質問 これからアーティストとして自立していくうえで、落ち込んだときのために、山本さんが自分に言い聞かせている言葉や言い回しがあれば教えてください。

山本耀司氏 落ち込んだときは死にたいくらい落ち込みます。そろそろ自殺しようかなとか考えます。一緒に住んでいる甥に、自殺の一番楽な方法をインターネットで調べろと言ってみたりもします。ただ、そんなことをしている反対側で僕を支えているのは、やはり僕のアトリエで一生懸命モノを創ってくれているベテランや若い連中です。僕が幸せになるんじゃなくて誰かを幸せにしたいという気持ち。

この前偶然テレビで見たんですが、アメリカの科学者たちが統計を取って調査した結果、世界中の先進国のどんなお金持ちでも後進国のどんな貧しい人でも、自分のためにお金を使うんじゃなくて他人のためにお金を使ったときに一番幸せを感じると科学的に証明されているみたいです。人のために何かをすることは自分の幸せなんだ。そういう意味では、世界中の女にかっこいい服を着せてあげるっていうのは最高の幸せだと感じて、いまだに自殺せずにできていると思います。

質問 40年間デザイナーをしてこられて、デザインのプロセスはどの作業が一番楽しいか、どれが一番打ち込めるものか教えてください。

山本耀司氏 ファッションデザインは映画創りに似ていまして、チームでやる仕事なんですね、デザイナー1人では絶対にできません。パターンメーカーとかパブリックプランナーがいて一緒に創っていく仕事です。その中でたとえば、パターンメーカーのある一人が、僕の出したイメージに対してパターンを作ってモデルに着せて、ある答えを出してくれるときに、たまにですが僕が想像したものの100倍くらい素晴らしい答えがフツと返ってきて、これは神様からのプレゼントじゃないかと思う瞬間があります、そういうときが最高に幸せです。すなわち、ファッションデザイナーは1人でできる仕事ではないということを申し上げておきます。

質問 将来、山本さんの元で働きたいと考えていますが、一緒に働くとしたらどんな人材を求めますか。

山本耀司氏 見た目が9割です、ブスは採りません(笑)。これは差別でもなんでもなくて、ブスは心がブスだからブスなんです。お母様から貰った生まれ持ったものを言っているのではなくて、心がブスだとブスなので、見た目が9割です(笑)。

質問 かっこいいと思う男性か女性はいますか？ かっこいいと思って影響された人や事柄があれば教えてくださいいただけますでしょうか。

山本耀司氏 答えを言う前に「残念ながら」という言い方をしますが、かっこいい男性、かっこいい女性が年々減っています。それは多分、社会がフラットでコンビニエントになりすぎているせいだと思います。人のまね、あるグループのまねをしていけばそれでかわいい、美しいと言われるから楽なほうに走りすぎている、そんな人たちが多からかっこいい人が少なくなっている感じがします。ファッションの場合そこがとっても重要な注意点で、要するに疑問を持っているか、ある流行とか現象に疑問を持てるか、等からクリエイションが始まります。先ほど汚染という言葉を使いましたが、流行に汚染される、何かに属していると安心する、そういうような人はかっこよく見えません。やっぱり疑問を持って、自分はこうありたいというふうに勇気を持って自分のスタイルを築いている人はかっこよく見えます。

質問 今までの人生で最も大きな失敗はなんですか？ それをどうやって乗り越えたか、そこから得た教訓で私たち学生に伝えることができるアドバイスがあったらお願いします。

山本耀司氏 失敗は何回もしましたね。ウェディングドレスだけでショーをしたとき、会場はものすごく盛り上がったのですが展示会では1点も売れなかったり、そういう失敗。それから、自分ではすごく力強く信じて送り出した作品たちが、全然観客には意味が伝わらないで会場がシーンと冷めて寒くなる失敗は過去にいっぱいあります。もちろんその逆に、「伝わった！」っていう熱いショーもありますが、失敗した記憶のほうが多いです。

質問 20年後、30年後のファッションはどうなるでしょうか？

山本耀司氏 勝手にしやがれ (笑)。

司会 素晴らしいお答えをありがとうございました。山本耀司さんが退場なさいます、皆さま今一度大きな拍手をお送りください。